

『和泉式部日記』の成立に関する試論

—その執筆契機と赤染衛門の関与について—

妹 尾 好 信

はじめに

平安時代の文学作品の執筆契機には、必ずや何らかの形での外部からの要請なり注文なりがあったことが考えられると思う。たとえば、『枕草子』は、伊周から献上された紙に書くべきものを中宮定子に求められたために清少納言が執筆したことがその跋文により明らかであるし、一方、これは伝説であるが、『源氏物語』は中宮彰子のもとに大斎院選子内親王から物語を求められたのに応じて紫式部が執筆したものとも言われている。文学作品というのは、作者の内なる執筆意欲のほかに、しかるべき発表の場と予想される読者とを得て、はじめて創作され世に送り出されていったものと考えられるのである。

このことは、作者の内面生活における真実なるものを吐露すべく

書かれたとされる日記文学についても同様なのであって、日記文学といえども、作者の内部から湧き上がる執筆意欲だけで書かれたものとは思えず、やはり具体的な発表の場や読者となるべき有力な人物を得ることによって書かれたものと見るべきだと思われるのである。

そういう観点から、私は先に『蜻蛉日記』と『更級日記』とを取り上げて、その執筆契機に関して憶説を述べたことがある⁽¹⁾。すなわち、『蜻蛉日記』の上巻は他ならぬ作者の夫兼家の要請によって書かれたものであり、『更級日記』は祐子内親王家専属の物語作家であった作者が同家サロンから求められて書いた自叙伝であると考えたのであるが、幸いにも一部の研究者の賛同を得ることができた。

本稿では、同じ女流日記文学の代表的作品のひとつである『和泉式部日記』を取り上げ、その執筆契機について私見を述べてみたいと思う。

周知のごとく、『和泉式部日記』は、伝本の多くが「和泉式部物語」と題されているほか、内容的にも三人称の記述で貫かれ、超越的視点と呼ばれる叙述法が随所に取られているなど、極めて物語的な性格の濃い作品で、早くから和泉式部自作説と他作説とが対立していた。しかしながら、今日では、ほとんどの研究者が自作説に立っており、ほぼ自作説に固まりつつあると言つてよいように思える。私も和泉式部の自作と見てよいと考えている。

さて、それでは、これまで『和泉式部日記』の成立や執筆意図についてどのように考えられて来たかと言つと、いろいろ論議はあるが、概ね、帥の宮敦道親王の没後一、二年の頃に、宮との交渉を客観化できる余裕の生じた和泉式部がその恋愛初期の頃を回想して執筆したものとするのが普通の見方である。和泉式部に筆を執らせたのは亡き帥の宮に対する追慕の念、往時を懐かしみ記録に留めたいと願う気持ちであるとされ、いわば作者の内部から高まってくる鬱勃たる執筆意欲がその動機であると考えられることが多いように見受けられる。確かに、愛する宮を失った和泉式部に、追慕の思いを形にし、恋愛生活の記念碑としたいという気持ちがあつたことは事実であろうと思う。しかしながら、自己の内的欲求だけでなくも手のこんだ物語的作品が書かれたとは考えにくいと思う。やは

り、直接的な執筆契機としては、もっと外的な力が、要請や勧誘といった形で働いたと考えるべきだと思われるのである。

そういう意味で、近年提唱された清水好子氏と坂本信道氏の説はそれぞれに注目し値すると思う。

清水氏は、「和泉がその歌才によって出仕したあと、主人筋から、世間を騒がせたあのことは、いったいほんとうはどうだったのかと、過去の行状についてお話を提供するように求められて書いたのではなからうか」と述べられた。和泉式部が中宮彰子のもとへ出仕した後、主人筋から求められて執筆したとの説は、外からの要請を考える点で、大いに刺激的である。

また、坂本氏は、「敦道親王は歌人として名高かつた和泉式部とかわした和歌を素材として、親王自身を主人公とする一篇を作ろうと考えたのではなかったか」、「自分を主人公とする作品を作るとなると、その相手としては風流なやりとりのできる人物が必要であるが、敦道親王にとっての和泉式部は、それにふさわしい歌人だったといえる」、「そうした歌人を相手にした風流なやりとりを記した『和泉式部日記』は、敦道親王が編ませた親王の家集としての性格を持つものだったかもしれない」と述べられ、『和泉式部日記』を書かせたのは敦道親王その人であるとの説を提唱された。これもすこぶる興味深い見解で、『蜻蛉日記』と兼家との関係をも考え合わせる、ありうることかと思われる。

ただ、兼家や、その兄伊予・兼通のごとく政権の中樞にあつてあらゆる面でのしきをけずり對抗していた存在と、敦道親王のような皇族とは全く立場が異なっており、氏の言われるように『蜻蛉日記』や『豊蔭』・『本院侍従集』を意識して『和泉式部日記』を書かせたとするにはやや抵抗感がなくもない。和泉式部の宮邸入りのところで終わっていることも不自然だし、親王がいったい誰にこの作品を読ませようとしたのかも不明である。だいいち、恋愛進行中であつた親王在世中に、和泉式部にこの作品を書くだけの余裕があつたかどうか疑問と言わざるをえない。

清水説については、啓発されるところが極めて多いのであるが、私はやはり、氏自身が従来とられていたように、和泉式部は出仕前にこの作品を書き、それが彼女の文才の替れを高めて、中宮彰子に出仕するきっかけになつたと考える立場をとりたいと思う。

と言うよりもむしろ、私は、和泉式部が中宮に出仕するにあたり、その条件として執筆を求められて作つたのではないかと考えるのである。

二

和泉式部の出仕は、寛弘五年（一〇〇八）末か、翌六年四月、葵祭の頃と考えられている。敦道親王の薨去は寛弘四年（一〇〇七）十月二日で、その間、一年ないし一年半ある。この間に和泉式部は

『和泉式部日記』を書き、それをひっきりや中宮彰子のもとへ出したのであらうと思う。

紫式部の出仕は寛弘二年（一〇〇五）末のことと考えられている。彼女の出仕が、すでに一部書きためられていた『源氏物語』の作者としての文才が道長の目に留まつたためであるのは間違いないであらう。和泉式部の場合は、その歌才の評判によつて出仕を求められたと見るのが普通であるが、歌だけではなく、実は物語的な散文も書けるのだというところを本作品の執筆によつて見せ、自らの文才を売り込んだのではないかと考えられる。そして、それは同時に、清水氏の言われたように、当時世間を騒がせた敦道親王との恋愛事件に関して、当事者として自ら告白・釈明し、人々の興味・関心に答える意味も持つたということなのであらうと思うのである。

そして、ここからは更なる憶測になるのであるが、和泉式部は自主的に自らの文才を売り込むために本作品を書いたわけではなく、有力な人物に勧められて執筆したのだと考えたい。その人物とは、和泉式部と親しく、道長の妻倫子に仕えて彰子のもとにもしばしば出入りしていた赤染衛門であらうと思う。彼女が和泉式部の中宮への出仕を道長方に仲介し、それにふさわしい手土産として本作品の執筆を求めたのであらうと思うのである。

赤染衛門が、敦道親王との恋愛中から和泉式部のことをしきりに
 気にして、親身になって忠告したりしていたことは周知のところだ
 ある。ひとつは、『赤染衛門集』（一八一―一八二）にある次のよ
 うな贈答である。

いづみしきぶとみちさだとなかたがひて、そちのみやにま
 むるとききてやりし

うつろはでしししのだの森を見よ帰りもぞするくすのうらら風

返し、しきぶ

秋風はすこく吹くともくすの葉のうらみがほには見えじとぞ思

ふ

「うつろはで」の歌の詞書は、同じ贈答を載せる『和泉式部集』
 （三六四―三六五）では、「みちさだきりてのち、帥の宮に参りぬ
 と聞きて、赤染衛門」とあり、また、『新古今集』（卷十八・雜下・
 一八二〇―一八二二）では、「和泉式部、みちさだにわすられて後、
 ほどなく、敦道親王かよふとききてつかはしける」とあつて、詠作
 時期に微妙な相違があるのであるが、いずれにせよ、『和泉式部日
 記』の記事の終わり頃、長保五年（一〇〇三）秋から冬にかけての
 頃の詠であることは間違いない。赤染衛門は和泉式部に、夫の道貞
 に去られたからといって、そう性急に帥の宮に心を移さずに、しば

らく我慢して道貞の様子を見ていなさい、もしかしたら帰って来る
 かも知れないから、と忠告している。ところが、和泉式部はもはや
 道貞には未練がないかのような強気の返歌をしている。

続いて『赤染衛門集』（一八三―一八四）には、次のような贈答
 が載っている。

みちさだみちのくになりぬと聞きて、いづみしきぶにや

りし

行人もとまるもいかに思ふらん別れてのちのまたのわかれば

かへし、しきぶ

別れてもおなじみやこにありしかばいとこのたびの心ちやはせ

し

この両歌は、『和泉式部集』（一八二―一八三）にも、少しほかし
 た形の詞書をともなつて載せられている。「行人も」の歌の詞書に
 よれば、これは翌寛弘元年（一〇〇四）春に道貞が陸奥守に任命さ
 れた時の詠といふことになる。すでに宮邸に引き取られていた和泉
 式部に、赤染衛門が、とうとう本当に夫婦別れてしまった心境は
 どうかと尋ねたのに対して、今度は和泉式部もさすがに悲しげに答
 えている。赤染衛門はこの頃、夫匡衡の任国尾張に住んでおり、こ
 れらの贈答は尾張から都の和泉式部のもとに送られたものと考えら
 れる。道貞は同年三月の陸奥赴任の途次、尾張の赤染衛門のもとに
 立ち寄り、歌などを交わしていることが、『赤染衛門集』（一八五―

一八六)に続いて載せられた兩人の贈答によってわかる。赤染衛門は道長の腹心であった道貞とも懇意であったので、和泉式部の夫婦仲を非常に気にしていたのであろうが、そればかりではなく、彼女には和泉式部に対して特別に親近感を抱く理由があったと考えられるのである。

四

そのひとつは、赤染・匡衡夫婦の息子挙周が和泉式部の妹に通っていたことである。『赤染衛門集』(一九四―一九六)に、次のような一連の歌群がある。

たかちか、まさむねがむすめに物いひそめて、ほどもなり
みたけにまうでて、かへりては京にしてしばしもなくてく
だりたりしかば、いみじくてやらせし

心にもあらでぞなげくよしの山君をみたけの程なかりしを

又のちに

出でてこしみちのまにまに花すすきまねくやどのみかへりみぞ
せし

かへし、あねのいづみしきぶ

とまるべき心ならねば花すすきただ秋行くとまたせそ^{*}みし

挙周が雅致の娘と交際を始めて間もない頃、御嶽に詣で、帰京してすぐ地方に下向した。これはおそらく両親のいる尾張に下ったので

あろう。それで気の毒に思つて赤染衛門が歌を送った。二首目の歌には「あねのいづみしきぶ」が返歌をしている。挙周に代わつて母の赤染衛門が、妹に代わつて姉の和泉式部が歌を詠むという形で、二人は贈答を交わしているのである。『赤染衛門集』の配列から見て、この贈答は長保五年(一一〇三)前後のことと考えられ、まさに『和泉式部日記』の記事が進行中の頃ということになる。

『赤染衛門集』(二〇七―二一〇)には次のような歌群もある。

白馬目、式部丞にてわたりしを見て、又の日、まさむねが
むすめのいひたりし、さりてのちなれば

いづくにかめのとまりけむゆきすぐるおほよそ人とかつはみな
がら

かへしかはりて

ゆきすぐるほどをたそとや休らひしおほよそ人の哀なりしに

其人、齋院長官かふきみといふひとにあひぬとききて、高

ちかにかはりてやりし

ちはやぶる神のかみとやおもふらん人はひとときかぬところ
に

かへし、あねのいづみしきぶ

そのかみの人をも人とおもはねばさしはなれたるしめのさかき
は

これによって、挙周と和泉式部の妹が別れた後も二人は代作の贈答

を続けていたことがわかるのである。

次に、和泉式部の父大江雅致は赤染衛門の夫匡衡と兄弟なのではないかという説が、岡一男氏により提唱されて以来、上村悦子氏や吉田幸一氏らが支持されて、かなり有力視されていることが挙げられる。赤染衛門にとって和泉式部が愛する夫の姪であれば、当然親近感を抱くであろうし、その行状をたしなめたりするのもうなずけるわけである。

五

もうひとつ、ここで私は、赤染衛門が和泉式部に対して特別に親近感を覚えてしかるべき理由を想定してみたいと思う。それは二人の出生にまつわる問題である。

和泉式部の父は、上述のように大江雅致ということになっている。『拾遺集』（巻二十・哀傷・一三四二）に唯一採られた彼女の歌の作者名が「雅致女式部」と書かれているし、上覚の『和歌色葉』に「大江雅致女」とあり、『勅撰作者部類』には「越前守大江雅致朝臣女」とあり、また『中古歌仙三十六人伝』にも「越前守大江雅致女」と記されているので信用されているのであるが、実はその『中古歌仙三十六人伝』には、

和泉式部。越前守大江雅致女。或説権中納言懐平卿女云々。

母越中守平保衡女。太皇太后宮昌子御乳母。号介内侍。和泉

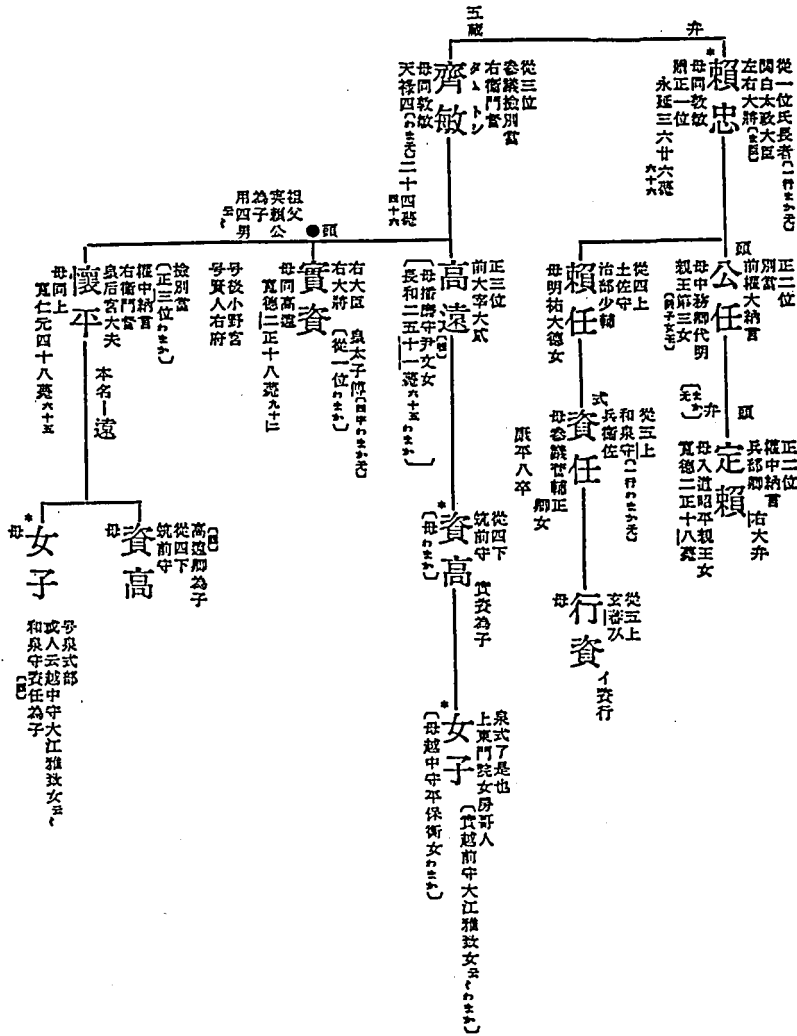
守橋道貞為妻。仍号和泉式部。童名御許丸。上東門院女房。
とあり、「或説」として「権中納言懐平卿女云々」とも記されているのである。また、『拾芥抄』にも、

「和」泉式部 越前守大江雅致女、上東門院女房、和泉守橋道貞為妻、仍号「和」泉式部、或「本云」権中納言懐平女、

とあつて、「越前守大江雅致女」とはしながらも、一方「或本云」として「権中納言懐平女」とも記している。権中納言藤原懐平は小野宮実頼の孫、斉敏の子、高遠・実資の兄弟で、『公卿補任』によると、寛仁元年（一〇一七）四月十八日に六十五歳で没しているから、天曆七年（九五三）の生まれということになる。和泉式部は天元元年（九七八）頃の生まれと考えられているので、約二十五歳の年長となり、ちょうど親子関係にふさわしい年齢である。

そこで、『尊卑分脈』で小野宮流の系図を見ると、次ページに掲げたように記されており、かなり複雑なことになっている。和泉式部の名前は、懐平の子に、「女子」として「号泉式部、或人云越中守大江雅致女云々、和泉守資任為子」と注記されて見えており、また、懐平の兄高遠の子資高の子の「女子」に「泉式部是也、上東門院女房、歌人、実越前守大江雅致女云々、母越中守平保衡女」と注記があり、やはり和泉式部の名が見えているのである。資高は高遠の次子ではなく、実は懐平の子で、伯父の高遠の養子になったこと

◎尊卑分脈・家賴公孫



が注記によってわかるが、その後さらに高遠の弟実資の養子になったこともわかる。その実資は祖母実頼の養子になっているのであるから、まことにややこしい限りである。

すなわち、『尊卑分脈』によると、和泉式部には四人の父がいることになる。①藤原懐平、②大江雅致、③藤原資高、④藤原資任の四人である。このうち、④の資任説は、懐平女子の注記に「和泉守資任為子」とあるのによるわけであるが、この人物は同じ小野宮家の頼忠の二男で公任の弟である頼任の子としてその名が見えている。「和泉守」の注記もあるので間違いないが、「康平八卒」とある注記によれば、康平八年（一〇六六）の没ということになるので、明らかに和泉式部より年下であり、養父となるのは無理であろう。おそらく、この「和泉守資任為子」という注記は、資任と資高を誤ったもので、正しくは「筑前守資高為子」とでもあるべきものと思われる。したがって、まず④の資任説は誤りとして片付けられよう。そして、③の資高が和泉式部の養父だということも全く無理なのである。というのも、『小右記』によると、長和二年（一〇一三）正月二十六日の条に、高遠の子資高が実資の養子として十五歳で元服したという記事が見えている。すなわち資高は長保元年（九九九）生まれということになり、和泉式部より二十歳ほど年下である。彼女が小野宮家の誰かの養女になったという事実があったとしても資任や資高の養女ではありえない。それはさておき、『尊卑分脈』で

は、『中古歌仙三十六人伝』や『拾芥抄』が記すのと同様、和泉式部の実父として大江雅致説と藤原懐平説の両方を記しているのであるが、懐平説の方をやや有力視しているように見える。

六

これを合理的に解釈するとすればどういうことになるであろうか。諸書によれば雅致説と懐平説はほぼ同等に有力で、ともに古くから行なわれていたようである。ということは、そもそも和泉式部には、出生時に父親に関して二通りの説が存在したのではないであろうか。すなわち、和泉式部の母平保衡女が懐平と雅致の双方と交渉しており、どちらが父親かわからなかったとか、小野宮家の御曹子懐平が昌子内親王家の女房であった保衡女と交際し子を儲けたが、忍ぶ仲であり、身分違いの恋でもあったので、同家に入内していた雅致に母子ともども託した、あるいは押しつけたというような経緯があったのではないかと思われるのである。そうだとすれば、和泉式部は表向きは大江雅致の子ということになったけれども、実は藤原懐平の子であり、世の人もそう噂したので、二様の伝えが記録されたのであろう。

こういう憶測は私が初めて思いついたわけではなく、すでに野村精一氏が、「とところで、（和泉式部の父親に関する——引用者注）これらの異説・異伝に、母である介内侍の異性関係と関わりと

はないだろうか。(中略)母の異性関係は彼女にとって一種の、原
体験¹⁴であったと言えるのではないか」とその可能性を示唆され、
また、増田繁夫氏も「あるいは、和泉の母が女房生活をしている過
程で懐平の子を産んだ、といった可能性もあるかも知れない」と、
消極的ながらも想像されているのである。私はこの想像は当たって
いるのではないかと思う。

ここで思い出されるのが、赤染衛門の出生にまつわる伝承である。
『袋草紙』上巻・雑談に載り、『中古歌仙三十六人伝』にも引かれ
るものであるが、『袋草紙』には次のようにある。¹⁶

江記云、赤染ハ赤染時用が女也。右衛門志尉等をふるによつて
号赤染衛門。実、兼盛女云々。離別彼母之後、称有女子欲尋取
之處、母惜て不然之由ヲ称して相論之間、為適檢非違使時用沙
汰之間、而彼母密通相住之間、彌称非兼盛子之由。深称時用子
云々。兼盛可令対面之由申と云々。

赤染衛門はその呼称が示すように赤染時用の娘ということになっ
ているけれども、実は平兼盛の娘である。彼女の母ははじめ兼盛の
妻であったが、離別した。やがて娘が生まれたと聞いた兼盛は自分
の子だと主張して引き取ろうとした。ところが母はこれを惜しんで
離さず、訴訟騒ぎになったが、母がたまたま檢非違使であった時用
に通じたため、兼盛は敗訴、娘は時用の子ということになったのだ
というのである。この伝えは「江記云」として載せられているから、

赤染衛門の晩年に生まれた曾孫大江匡房から出た話なので信憑性は
高く、赤染衛門自身、自らの出生のいきさつについては理解してい
たものと思われる。そういう彼女が自分と同じような出生の事情を
抱えた和泉式部に深く同情し、心からの親近感を抱いていたとして
も全く不思議はなからう。

七

赤染衛門は、寛弘二年(一〇〇五)には夫匡衡の尾張守の任が果
てて上京している。その二年後、敦道親王に死なれ、夫道貞にも去
られて寂しく暮らしている和泉式部を見て、黙って放っておくはず
はない。おそらく彼女は和泉式部に中宮彰子への出仕を勧め、主人
倫子を通じて道長に推薦したのだろうと思われる。その際に、出仕
の手土産として、和泉式部の文才をアピールする意味と、世間を騒
がせた恋愛事件について釈明する意味とを兼ねて、告白小説的動物
語を書くよう求めたのではないであろうか。あるいはそれは出仕の
条件として道長が要望した可能性もあろうが、赤染衛門としては、
やがて書くつもり『栄花物語』の資料にでもなれば一挙両得だと
考えていたのかも知れない。

出仕を決意した和泉式部は赤染衛門に勧められるまま『和泉式部
日記』を書いた。坂本氏が指摘されたように、ここでは帥の宮を理
想化し称揚して、それにふさわしいものとして女主人公の歌才・風

流心の豊かさを主張している。また、男出入りが激しく色好みであるという女主人公の世評を懸命に打ち消そうとしているのも、この作品が彼女の就職運動の一環として書かれた自己PRの書であるからだと考えられるわけである。

寛弘五年（一〇〇八）から翌六年（一〇〇九）の初め頃にこの作品は書かれ、それをひっさげて和泉式部は中宮彰子のもとに出仕した。その時、おそらく彼女は藤原懐平の近親者の養女として出仕したのだと思う。なぜなら、諸先学が指摘されるように、和泉式部は敦道親王との恋愛事件のために（あるいはそれ以前の為尊親王との恋愛事件のためとも言われる）父雅致から勘当されていたらしいからである。実家の後ろ盾のない彼女が宮仕えするにはしかるべき人の養女となる必要があったので、おそらく赤染衛門か道長かの口利きで実父懐平に相談し、その近親者の養女となることで出仕が実現したのではないかと想像される。こういう例としては、たとえば、中宮彰子の筆頭女房であった大納言の君が、彰子入内の際、すでに父を失っていたので、伯父の源時中の養女として出仕するよう道長に計らわれたことなどが挙げられる。これは角田文衛氏（註17）と萩谷朴氏（註18）が考証されたものであるが、ここでは簡略に記述された角田氏の著作から一部引用しておく。

大納言 中宮・藤原彰子の女房（おそらく御匣殿別当）。のち、東宮・敦成親王の宣旨。参議左大辨・源扶義（九五一一）九

九八）の娘。名は廉子。初め源則理と結婚して破鏡の憂き目を見た。ついで道長の愛人の一人となった。長保元年（九九九）における彰子の入内にさいし、道長は父を喪っていた廉子を伯父の大納言・源時中（九四三一一〇〇二）の養女とし、大納言という候名で彰子の筆頭の女房としたようである。

『尊卑分脈』が伝える和泉式部の養父説はいずれも誤りであるが、全く根も葉もないことは思われない。実父懐平の周辺に彼女の養父となった人物がいたことは確かだと思われるのである。さらに想像をたくましくすれば、その人物は、資高の養父であった高遠あたりではないかとも考えられよう。野村氏が和泉式部と大式高遠との関係に着目され、「『伝西行筆和泉式部統集』はなぜか古来『高遠大式集』として伝えられ、あるいは和泉式部歌への高遠歌の影響が指摘されているのである」と述べられているのも大いに参考になるであろう。

八

さて、最後に、赤染衛門が和泉式部に『和泉式部日記』の執筆を勧めたと考えた場合、当然その最初の読者は赤染衛門ということになる。そこで、赤染衛門が『和泉式部日記』を最初に読んだ形跡ではないかと見られる事象を指摘したいと思う。それは、次のような『和泉式部日記』末尾の一文である。（註21）

宮の上御文書き、女御どのの御ことば、さしもあらず、書きな
しなめり、と本に。

宮の北の方の御手紙や女御殿の御言葉は、実際にはそんなもので
はあるまい、作者の作り書きのようだ、と本にある、というのであ
る。このいかにも注記めいた一文の解釈についてはいろいろ議論が
あるのであるが、私はこれを、この作品の最初の読者である赤染衛
門が記したものと考えたい。最後の「と本に」は書写の過程で加わっ
たもので、赤染衛門が書いたのは「書きなしなめり」までであろう。
群書類従本のように、「と本に」がない伝本も存在する。

赤染衛門は和泉式部が書いたこの作品にまず目を通し、その感想
を書き付けたのだと思われる。つまり、赤染衛門は、本作品末尾近
くの帥の宮の北の方とその姉春宮の女御とのやりとりに関して独
自に情報を得ており、それはそこに記されているような内容のもの
ではないと言っているのである。赤染衛門の理解がどのようなもの
であったかは、彼女の著作とされる『栄花物語』の記事を見れば明
らかである。巻八「はつはな」に、次のようにある。

小一条の中の君と聞ゆるは、宣耀殿の御弟の君、殿も上も、と
もかうもなさでうせ給にしかば、いかで女御殿に劣らぬ様的事
をなどおぼし構へて、東宮の御弟の帥宮に聞えつげ給へりしか
ば、南院に迎へ給へりしかど、年月に添へて御心ざし浅うなり
もて行きて、和泉守みちさだがめをおぼし騒ぎて、この君をば

事の外におぼしたりしかば、居煩ひて、小一条のおぼ北の方の
御許に帰り給にしぞかし。されば東宮も宣耀殿も、一この事を
我口入れたらましかばいかにきよくからまし。知らぬ事なれ
ば、心安し」とぞおぼし宣はせける。

こちらの記事では、和泉式部の宮邸入りにもなつて北の方が実家
に帰つたことに対し、姉の春宮の女御（宣耀殿）はずいぶん突き放
したような冷淡な対応をしている。『和泉式部日記』に、

北の方の御姉、春宮の女御にて候ひ給ふ、里にもものし給ふは
どにて、御文あり。「いかにぞ。このごろ人のいふことはまこ
とか。我さへ人げなくなんおぼゆる。夜の間にもわたらせ給へ
かし」とあるを、

云々とあつて、春宮の女御は帥の宮が和泉式部を迎え取つたことに
対して北の方に深い同情を示しているように書かれているのは全
く対照的である。この両書の記事の相違については、すでに坂本氏
も注目されたところであるが、私は、こういう理解の違いがあつた
ので、赤染衛門は末尾に一筆コメントを加えたのであらうと思う。

こうして赤染衛門は『和泉式部日記』を道長方に提出し、作者の
和泉式部がいかに中宮彰子の女房としてふさわしい、歌才ばかりで
はなく文才もあるすぐれた女性であるかを売り込んだと考えられる
のである。

おわりに

最後に、繰り返してまとめると、『和泉式部日記』は、寛弘五年（一一〇八）から同六年（一一〇九）の初め頃、赤染衛門の勧めを受けて、中宮彰子へ出仕するための就職運動の一環として和泉式部によって書かれたもので、第一読者は赤染衛門、第二読者が道長であつたと考えたい。赤染衛門が親身になって和泉式部を道長方に推薦したのは、姻戚関係の近さの他に、両者に出生の複雑さが共通していたため親近感を抱いたのだと想像されるのである。憶測に憶測を重ねた試論であるが、大方の御批正をお願いする次第である。

（平成三年七月稿）

[注]

- 1、拙稿「王朝女流日記の執筆契機に関する憶説——『蜻蛉日記』と『更級日記』の場合——」『国語の研究』第一三号（平元・六）。
- 2、「王朝の歌人」6『和泉式部 恋歌まんだら』（昭六〇・集英社）。九五頁。
- 3、「『和泉式部日記』成立の背景」『語文研究』第六八号（平元・一二）。
- 4、本稿で言及する坂本氏の所説は、すべて同論文に拠る。
- 5、『赤染衛門集』本文の引用は、すべて『新編国歌大観』第三卷（昭六〇・角川書店）に拠る。底本は島原松平文庫本。
- 6、引用は『新編国歌大観』第三卷（昭六〇・角川書店）に拠る。底本は解原本。

- 6、引用は『新編国歌大観』第一卷（昭五八・角川書店）に拠る。
- 7、『源氏物語の基礎的研究』（昭四一・増訂版 東京堂書店）。二八二頁。
- 8、「和泉式部考」『王朝女流作家の研究』（昭五〇・笠間書院）所収。五五頁。
- 9、『日本古典文学大辞典』第一卷（昭五八・岩波書店）の「和泉式部」の項。
- 10、引用は『群書類従』第五輯（昭七・続群書類従完成会）に拠る。但し、返り点を省略した。
- 11、引用は『増訂故実叢書』第二卷（昭三・吉川弘文館）に拠る。但し、返り点を省略した。
- 12、引用は『新訂増補国史大系』（昭四七・吉川弘文館）所収本に拠る。
- 13、同様の例として、片桐洋一氏が、阿保親王の子とも大江本主の子とも伝える大江音人について、阿保親王が大宰府への左遷に際して、妊娠させた侍女を本主に託したのではないかと想像されている（『日本の作家』5『天才作家の虚像と実像 在原業平・小野小町』（平三・新興社）二六頁）ことなどが挙げられる。
- 14、「新潮日本古典集成」『和泉式部日記 和泉式部集』（昭五六・新潮社）「解説」。一六二頁。本稿で言及する野村氏の所説はすべて同書に拠る。
- 15、『冥途 評伝和泉式部』（昭六二・世界思想社）。五一頁。
- 16、引用は『日本歌学大系』第二卷（昭三一・風間書房）所収本に拠る。六八頁。但し、返り点を省略した。
- 17、「道長と紫式部」『紫式部の身辺』（昭四〇・古代学協会）所収。八三頁。
- 18、『紫式部日記全注釈』上卷（昭四六・角川書店）。一四七頁。
- 19、『教育社歴史新書』30『日本の女性名』（上）（昭五五・教育社）。二二頁。

20、もっとも、『御堂閔白記』寛仁二年（一〇一八）一月二十一日の条には和泉式部を「江式部」と記しているから、この頃依然大江氏を名乗っていたようである。これには、この養子縁組がかなり形式的なものであったこと、道長の養子になった源成信や源経房の場合のように改姓を伴わない縁組も少なくなかったこと、「江式部」の呼称が彼女の通称として定着していたことなどが理由として考えられよう。

21、『和泉式部日記』本文の引用は、すべて岩波文庫『和泉式部日記』（清水文雄氏校注、昭五六改版・岩波書店）に拠る。

22、引用は松村博司・山中裕氏校注「日本古典文学大系」75『栄花物語』上（昭三九・岩波書店）に拠る。傍線は引用者。

〔付記〕 本稿は、平成三年度広島大学国語国文学会春季研究集会（平成三年六月二十三日）において、同題で口頭発表した内容を成稿としたものである。席上、御助言を賜わった位藤邦生先生並びに松原一義氏に、記して御礼申しあげます。

——大分大学教育学部講師——